

地域性の形成論理

1. 研究組織

研究代表者：坪内 良博（京都大学東南アジア研究センター・教授）

研究分担者：石井 溥（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授）

加納 啓良（東京大学東洋文化研究所・教授）

北原 淳（神戸大学文学部・教授）

桜井由躬雄（東京大学文学部・教授）

山下 晋司（東京大学教養学部・教授）

田中 耕司（京都大学東南アジア研究センター・助教授）

2. 研究のねらい・目的

本研究班では、地域研究の対象である「地域」の社会および文化の独自性の形成にかかわる普遍論理と個別論理の交錯のメカニズムを、東南アジアおよびそれを挟む中国・インドの状況を手がかりとして解明することを研究の大きな枠組みとしている。そのために、平成5年度においては、東南アジアの社会・文化の特徴を表すさまざまなキーワードを東南アジア各地の具体的事例に即して、また東南アジア以外の地域との比較において掘り下げていくこと、および「中心と周辺」「国家とエスニシティ」あるいは「都市と農村」というような二項対立的な概念枠組みのなかで東南アジアの地域性の形成と変容のダイナミズムをあつかうこと、この二つを研究班の目的として設定した。平成6年度には、以上の二つの目的を念頭に、各メンバーの個別課題に加えて、班全体の共通テーマとして、「フロンティア」ならびに「周辺と境界」という課題をあつかうことにした。

以上のような平成5年度と6年度の活動をうけて、本年度は「複合性」を共通テーマに研究会を開催することにした。東南アジアの社会をとらえる概念として、すでに古典的とも言えるが、「複合社会」という概念がある。この概念を一方に据えながら、より多角的に東南アジアの「複合性」をとらえ直し、東南アジアの地域性の形成に迫ることにした。

「複合性」を検討するにあたって留意しなければならない点が多い。まず問題となるのは、複合を論ずる場合の単位とその境界の問題である。平成6年度に「周辺と境界」という共通テーマによって境界の問題をあつかったが、その同じ問題が複合を論ずる場合にも考慮されなければならない。単位を都市や国家など、行政区画によって比較的明示的に区分された範囲とするのか、民族あるいは国家を超えたような漠然としたまとまりとするのか、複合を論ずる場合の単位の問題がまず重要な課題として登場しよう。次に、何が複合しているのか、という複合

する主体の問題がある。民族、文化、経済などのいずれが複合しているのか、あるいはそれらが融合したものが複合しているのか、複合の主体という問題も明らかにされねばならない大きな課題である。さらに、どんなふうに複合しているのか、すなわち複合の状態についても考察する必要がある。異質なものが棲み分けているのか、融合しているのか、あるいはたんに併存しているのか、このような複合の状態についても対象に即して検証される必要がある。そしてさらに、複合性が検証されたとして、その複合状況がどのようにして生成してきたのか、複合に至る歴史過程も明らかにすべき課題である。植民地化、脱植民地化、国民国家形成などの歴史過程だけでなく、人々の移動・移住、物資の交易などさまざまな側面での複合に至る歴史過程の解明が必要となろう。そして、これらの検証を経たうえで、最後の課題として考察されねばならないのが、複合状況がもつ将来への可能性の展望である。東南アジアが複合性をその地域の特色として持つなら、その個性を将来の世界に活かす道は何か。複合性を保持したまま異質なものの統一・融合が可能なのか、統一・融合の結果は複合性の喪失なのか、こうした将来展望にかかわる思考の枠組みを形成することも、本研究課題の性格からして、重要な課題と言わねばならない。

当初のこのような問題意識を深化させるために、平成7年度においては「複合性」を共通テーマに以下のとおり研究会を開催し、東南アジアの地域性の形成と変容のダイナミズムに迫ろうとした。

3. 平成7年度の研究経過

上述のような共通の研究課題を設定して、研究班主体の以下の研究会を開催するとともに、関連する公募研究班との合同研究会をもった。

研究打合せ会(5月22日、京大会館)

各メンバーの平成6年度の研究経過をふまえて今年度の役割分担課題を打合せ、下記のような課題をそれぞれ設定した。また、平成7年度の研究実施計画を打合わせた。

坪内良博：全体の総括、人の移動を介して見た東南アジアの複合性。

石井 溥：ネパールの複合社会。

加納啓良：19世紀ジャワの農業発展の比較。

北原 淳：近代国家の形成とナショナリズム、とくにタイにおける華僑。

桜井由躬雄：「歴史圏」形成からみた東南アジアにおけるベトナムの特異性。

山下晋司：植民地主義と民族形成。

田中耕司：開拓前線における複合社会。

第1回研究会(7月15日、京大会館)

「東南アジアの複合性をめぐって(1)」というテーマで研究分担者2名が個々の分担課題に沿った研究発表を行った。発表者・テーマは以下のとおりである。

田中耕司「開拓前線における適応戦略——民族的差異と『インドネシア式』複合社会」

北原 淳「国家・都市・農村関係の認識——タイ近現代の場合」

田中は、昨年度の研究発表「フロンティア世界としての東南アジア：資源をめぐる中心と辺境」を敷衍するかたちで、インドネシアのスラウェシ島の開拓地での調査事例にもとづいて、開拓当初の入植者の民族的差異が顕現する時代からその差異が溶解していく時代にいたる開拓前線の民族の複合状況を報告した。また、モノと情報のネットワークが開拓社会がもつ差異を複合へと変形させることを、中国系商人の資本の流れ、行政機構の整備などを事例に検証した。そして、現在、地方レベルで急速に進展している行政機構の整備が「インドネシア式」複合社会とも言える独特の複合状況を生み出していることを現状での問題点として提起した。

北原も、平成6年度の報告「タイにおける都市・農村関係の歴史的展開」を承けつつ、視点をさらに近現代へと移し、経済成長のなかでの国家の役割、複合社会型の国民国家形成に代わる融合社会型の市民社会の形成、あるいは反華僑ナショナリズムの終焉など、現代タイに関する問題関心を報告した。

第2回研究会(11月26日、学士会館分館)

第1回研究会に続いて、同じく「東南アジアの複合性をめぐって(2)」のテーマで以下の研究発表が行われた。

加納啓良「19世紀初めのジャワ村落——バンギル県の地租査定簿から」

坪内良博「複合性再考」

加納は従来から19世紀ジャワの地租査定簿の分析によってジャワ農村の社会経済変容について考察を続けているが、今回は、東ジャワの現在のパスルアン県についての記録であるバンギル県詳細地租査定簿の分析結果を報告した。バンギル県のおかれた歴史的背景の説明のあと、当時の村落と現在の村落の照合結果、および水田面積、畑面積、耕作者のデータの分析結果が報告され、当時における開拓の進行状況や、小人口状況から稠密人口状況への移行の過程、域内における農業発展の複合状況などについて議論が行われた。

坪内は、ファーニヴァルの複合社会論が東南アジアの社会を理解するうえで示唆的ではあるものの、現代の東南アジアの地域性を考えるときにはその有効性を再考する必要があるとした

うえで、「複合」という概念をめぐる問題点を提起した。都市におけるさまざまな民族集団や階級のいわばごちゃ混ぜ的な混合状態、ボルネオ（カリマンタン）の川すじに見られるような、上流域と下流域のあいだの民族と支配関係の対比的な併存状態、あるいはマレーシアに見られるような地理的に明瞭な経済の棲み分け状態などを例示しながら、先に掲げた、複合の単位、複合の主体、複合の状態、複合の形成過程、複合の現代的意義など、「複合」を論じる場合の論点を整理した。

第3回研究会（3月2日、京大会館）

同じく「東南アジアの複合性をめぐって（3）」の共通テーマで、班員の石井溥、桜井由躬雄の2名が以下の発表を行った。研究班以外からも討論参加者があり、東南アジアが複合性を地域の特性とするに至った歴史的過程について議論が交わされた。また、南アジアとの対比で、東南アジアの複合性を理解する枠組みが論じられた。

桜井由躬雄「亜地域の中の中心と辺境」

石井 溥「複合性・全体性と階層性／平等性 ― 南アジアの視点から」

桜井は、昨年の同じテーマでの発表を承けて、一定の時期に共通した歴史的運命を共有した特定の範囲を「歴史圏」として定義したうえで、「地域」はその歴史圏の重層のうえに成立するとした。そして、その「地域」を対象にする歴史研究が「歴史地域学」で、地域のフィールドワークに根ざした、歴史学から歴史地域学への転換の意義を論じた。具体的には、人々の移動が希薄で人口増加が内向した紅河デルタと、頻繁な移動と定着を繰り返し人口増加が拡散的に吸収されたメコンデルタを対比しながら、地域の個性を感性的かつ分析的にあつかう「歴史地域学」の手法と、その実践を両デルタでの調査を事例に報告した。

石井は、坪内が行った前回の「複合性再考」での問題提起を承けるかたちで、ファーニヴァルの複合社会論を下敷きにしながら、南アジアのカースト的世界の複合性を論じた。論点は、複合性を論じる場合に、その複合状況を包含する全体としての単位、すなわち地域の全体性がまず定置され、その全体性のなかで複合する要素を「分離」する必要があるという点に集約された。その点で、異文化を許容し、全てのものをそのシステムの中に取り込むことが可能な南アジアのカースト制が、カースト世界という全体性のなかにさまざまな局面の複合性を実現してきたことを指摘し、その点が東南アジアの複合社会との重要な比較の視点となることを提起した。

合同研究会（3月3日、京大会館）

A02公募研究「東南アジア大陸部における民族間関係と『地域』の生成」研究班（代表者：高

谷紀夫)との合同研究会を開催した。同研究班は、東南アジア大陸部の民族間関係の動態のなかから地域が形成されるという視点で今年度から研究活動を開始しているが、同じく地域の形成をテーマに掲げているので、両研究班のメンバーが揃った年度末に「東南アジアの民族と複合性」のテーマで、下記の話題提供によって合同研究会を開催した。

速水洋子(東北大学文学部、公募研究班招待発表者)

「北タイ・カレン族における『民族』と『文化』の再考 — 仏教化の事例から」

高谷紀夫(広島大学総合科学部、公募研究班代表者)

「『ジャン文化』と地域性」

床呂郁哉(東京大学教養学部、計画研究班招待発表者)

「スーローにおける民族形成と地域システム」

山下晋司「"Glocalization" — 地域性と民族複合性の形成論理」

いずれの報告も、民族間の関係性と、民族をとりまくさらに大きな枠組みとしての国家・文明などとの拮抗のなかでエスニシティが新たに再編されていることを明らかにしたもので、各報告のあと、地域形成における歴史性の意義、あるいは地域や民族の差異が形成されるプロセスの解明、そして逆に、その差異を超える同質性や共通性(あるいは上位の複合)への目配りの重要性など、東南アジアの地域性を考察するうえでとりあげなければならない問題点について議論が交わされた。

4. 研究の成果とフロンティア

以上の研究会での研究発表と個別のテーマの追究を中心に平成7年度が経過したが、「複合性」という、従来から東南アジアでよく問題にされてきたタームを共通テーマとして設定したので、それをめぐって多面的な論議を展開することができた。とくに、東南アジア研究ではおなじみの複合社会論という視点ではなく、より抽象度を高めた「複合性」というかたちでテーマを設定することによって、このタームをめぐる多様な地域論の展開が期待できるところにまで議論を煮詰めることができ、概ね順調に所期の研究活動を進めることができた。以下に、研究組織のメンバーそれぞれがまとめた「研究の成果とフロンティア」を引用して、平成7年度の成果を概括することにしたい。

坪内良博： 昨年度に続けて、本年度も共通のテーマを設定したが、研究班全体の研究活動を方向付けるのに効果があったように思う。私自身は、その共通テーマである「複合性」をできるだけ現代の東南アジアに即して考察する必要性を感じており、それをマレーシアの農

村におけるこの20年の変化のなかで具体的に検討する作業を続けている。また、この個別の一地域における作業を、東南アジア全体の枠組みのなかで検証することも必要で、そうした試みとして「複合性再考」というテーマで、研究会で話題提供を試みた。小人口世界におけるフロンティア性の現出、そしてそのフロンティア状況下での人口増加にともなう複合性の現出、そしてさらに現在のグローバル化における地域や民族の再編等々、東南アジアの地域理解にむけての課題が昨年から今年の研究会のなかで幾分整理されてきたように思うので、この方向での班全体の研究成果のまとめについて、そろそろ構想をあたためねばならない時期にきたことを実感している。

石井 溥： 南アジアにおける文明の中心地域と周辺地域の文化・社会のあり方の相違、およびその間の相互関係、文化変化の様相などについての分析・考察を深めるため、文明の中心地域の例として、古代以来バラモン文化の中心のひとつをなしてきたミティラーを、他方、周辺地域の例としてネパール山地部とカトマンズ盆地をとりあげ、主に儀礼の側面からの比較研究を行った。また、それらとインドの他の地域との比較も心がけたが、その結果、「南インド」文化に対応する「北インド的バラモン文化」に関する従来の論議を再考する必要性が生じた。次に、東南アジアと南アジアの周辺地域と南アジアの比較研究を、「複合性」の観点から進めるための概念的考察を行い、東南アジアと南アジアはどちらも複合社会と呼べるが、その間には階層性／平等性に関する大きな差異があることを指摘した。

加納啓良： 以下の三点を今年度の研究活動として実施した。(1)ジャワにおける「稠密社会」形成の歴史的起源と過程を、19世紀初めの地稅制度導入期の農村について検討するため、東部ジャワのバングル県の地稅賦課「詳細査定簿」(detailed settlement report)に記載されたデータをパソコン・データベースに入力する作業を昨年度に引き続き進め、村落別のデータの入力とその基本的分析作業を終えた。(2)これに関連して、ジャワにおける地稅制度の展開過程を、19世紀はじめから1930年代までの植民地期について二次的文献資料によって整理し、そこに現れたジャワの土地制度と農村社会構造の特質を考察した。(3)昨年度に続き、近現代の東南アジア地域全体の中でのインドネシア、とくにジャワの国際経済的地位とその変化をよりグローバルな視野から考え直すために、オランダ語の基本資料に遡って1909～23年の時期のインドネシアの輸出入時系列統計の収集を行った。

北原 淳： タイのNGO村落開発運動における共同体の言説について、日本の戦後の共同体論の変遷を参照しながら、検討を加える作業を継続して、著書(『共同体の思想』世界思想社、1996年3月刊)にまとめた。その結果、(1)タイNGOの共同体論は、東西の近代化の初

期過程に現れた共同体論と同様に、小さな村落という地域共同体に対して、それ一つだけで従来のタイの近代化過程に代位するような役割を期待している。(2)しかし、工業化が進行中のタイの村落は都市の発展過程に巻き込まれているので、それにふさわしい共同体論は、都市を中心とする市民社会的状況と両立するような部分システム的な言説とプランを用意すべきである、という点を明らかにした。また、村落の社会や文化をナショナリズムの根底に据えるような言説が、タイの戦前の法令、言説のなかには、1932年移行の進歩的な知識人の場合も含めて、現れていないことを明らかにした。

桜井由躬雄： 地域性を地域の主張としてとらえる。1993年よりベトナム紅河デルタ、自然堤防末端村落の研究を継続するとともに、95年末から南部メコンデルタのカインハウ村落に新しい調査拠点を設定した。この結果、80年代より継続中の東北タイ、マハチャナチャイ郡の調査に加え、3点比較が可能になり、それぞれの地域性が明確になった。問題意識は以下のとおりである。(1)紅河デルタの地域的主張を、村落構造が基本的には動かないもの、人口定着型としてとらえる。紅河デルタの村落立地、および村落構造はおおむね18世紀中頃までには決定したと考えられるが、この構造は、きわめて強い保守性をもっている。1920年代から顕著になる人口増大は徹底した財産の分割、平等化、零細な地片の中での土地生産性の集約化により処理された。伝統的公田制度の割替え、土地改革、社会主義的合作社化を経て、合作社解体後の現在、平均 2,000平方メートルほどの零細農家の集中居住がその特色となっている。土地生産性がほぼ限界にきた今日、在地での労働集約型産業の振興が追求されている。(2)この対極にある東北タイ農村では、18世紀末段階に大きな移動があり、ついで19世紀後半、1920年代と3期にわたるムン河流域からチー河上流部への大規模な移住、新村建設を繰り返して、人口増大を解決している。土地への投資による土地生産性の向上は、一部をのぞき、ほとんど考えられていない。現在では、農業的フロンティアの喪失から、人口移動の対象はバンコクなど大都市に集中しているが、移動、排出によって人口増加を解決しようとする構造に変化はない。(3)メコンデルタ農村はいわば中間項にあたる。メコンデルタは人口稠密な新デルタ、砂丘列上と、比較的人口希薄な西部沿岸湿地や西バムコー河に沿った内陸後背湿地に分かれる。18世紀初期に本格化した新デルタの定住化は、19世紀末の大運河時代に終息し、20世紀初期から新デルタから西部沿岸湿地への移住が始まり、この動きは1940年代に終息する。戦後は最後に残された内陸後背湿地への移動が始まり、現在も継続中である。しかし、移住者の構造でみると、村落の中核層は戦前以来、きわめて安定的な構造を有し、その周辺に発生した土地無し農民層が不安定な移住を繰り返している。つまり移住家系と非移住家系が明確に分離している。

以上の3つの構造は、現在時点において発生したものではなく、18世紀以来の大陸部東南アジアに発生した、構造的・地域性の20世紀末における表現である。

山下晋司：本年度の課題は、東南アジアのエスニシティを植民地主義と脱植民地化という歴史過程のなかで検討することであった。文献研究とならんで本年度も現地調査の機会にめぐまれた。平成7年8月から10月にかけてインドネシアのジャカルタとバリ、およびマレーシアのサバ州で調査を行った（平成7年度文部省科学研究費補助金国際学術研究「東南アジア島嶼部における国民文化と地方文化の相関的動態」代表：山下晋司）。とくにインドネシアでは昨年は独立50周年にあたっていたため、独立記念日である8月17日を中心にさまざまな記念事業が行われ、その調査から本年度の研究課題にとってきわめて有益なデータが得られた。とりわけ植民地時代に創造された文化遺産が脱植民地化と国民国家形成の過程で流用され、独立50周年を祝う国家儀礼においておおいに活用されていたという事実を確認できた点が有益であった。

田中耕司：前年度の「フロンティア」や「周辺と境界」を論じたのと同じ地域でのフィールド調査にもとづいて、現代インドネシアの複合状況を、開拓社会から農村社会への移行過程のなかで探ることにした。開拓初期の複数民族集団の流入によるいわば即自的な複合状況から、村落形成のなかで生起するさまざまな融合・対立・協力を経て、いわば対自的な複合状況が現れる過程を本年度の第1回研究会において報告した。前年度は、フロンティア社会における資源管理・資源利用に関わる問題点を整理したが、それを承けて今年度は、資源の利用・流通を通じて形成される入植集団の差異化、そして村落形成の過程で必然的に生起する行政（国家）との関係性などが、「インドネシア的」といってよい独特の複合社会を形成していることを考察した。

5. 今後の課題

以上に述べたような平成7年度の研究経過およびそれまでの平成5、6年度の研究経過をもとに、最終年度にあたる平成8年度には研究とりまとめの方向へ計画全体を集約していく必要がある。そのためにも、東南アジアの地域性形成に関連して、これまで取り上げてきた「フロンティア」「周辺と境界」、あるいは「複合性」などの共通テーマに加えて、来年度は東南アジアの地域性形成に関わる歴史過程の課題を共通のテーマとすることを構想している。すでに「歴史圏」あるいは今年度の桜井報告にあるように「歴史地域学」という問題意識が共有されてきたので、その面からの考察を深めようとする試みである。また、前年度までと同様に、東南アジアの域内だけでなく、他地域との比較の視点も加味した研究の進め方もまだ不十分であ

るので、A02の公募研究班だけでなく、他班との合同研究会等を通じて、研究の一層の深化を図ることになろう。

以下に各メンバーの抱く今後の課題を掲げて今年度の行動記録のまとめとする。

坪内良博： 来年度は、研究代表者として、また重点領域全体の領域代表者として研究領域全体のとりまとめのための構想を練らなければならない。その一貫としてA02計画研究班が全体のとりまとめにどんな貢献ができるのか、その点に力を注ぎたい。一メンバーとしては、この研究班で論じてきた「小人口世界」や「複合性」などの問題意識から東南アジアの地域性形成を論じる作業を続けたい。

石井 淳： おもに以下の3側面について研究を進める。(1)比較考察を、より広い視野をもって継続する。依然、チベット、ブータン、シッキムおよびその周辺の非カーストの社会との比較考察、東南アジアとの比較考察が不足しているため、その面に留意しつつフィールド調査、文献研究を行う。(2)「民主化」以降のネパールの急速な社会変化を具体的にあとづけ、また、変化の地域差をみるために、山地部、南部低地部およびカトマンズ盆地において、以前、集約調査を行った村落社会を再度調査し研究する。(3)地域差、中心、周辺文化、複合性などについての概念を精緻化し、かつそれらを総合して、南アジア、東南アジアにおける地域性の構造とその形成についての考察を深める。

加納啓良： 主に次の3つの課題を念頭において研究のとりまとめを行い、最終報告の執筆準備を行いたいと考えている。(1)東部ジャワ・バンギル県の地税賦課「詳細査定簿」の各耕作者別データの入力作業を終えてその分析を行うとともに、これをすでに行った村別データの分析結果と照らし合わせて結論を導くこと。(2)その成果を、ジャワの他地域についての研究成果と比較対照しながら、ジャワのなかの地域性の形成過程とその意味を考究すること。(3)インドネシアの他地域、東南アジアの他地域、日本、台湾などのケースと対比しながら、ジャワにおける稠密型農業社会の形成が東南アジア全体の地域性の中で占める特殊性とその比較史的意味を明らかにすること。

北原 淳： 都鄙関係の現代的課題として、「東南アジア的な市民社会の形成」を展望することをテーマとする。そのために、さしあたり、(1)戦前の農村社会に対する代表的知識人の言説をさらに詳しく検討して、ナショナリズムの文化的源泉を検討する。(2)華僑・華人社会の都市社会への定着過程を検討する。(3)欧米社会的な国家論を東南アジアへ適用する際の限界について、マードック大学グループの議論を出発点に考える。

桜井由躬雄： 前述の「研究の成果とフロンティア」で述べた諸点は、3年間にわたる観察

からえられたものであるが、これを科学的に実証するための資料的整理までにはおよんでいない。1996年度は第一にこれまで収集された3地域の資料整理にあてられる。第二に、3地点間の継続調査は必須である。第三に、これまでの暫定的な結論の公表の準備に入る。

山下晋司： 来年度は、4年間にわたる本研究の最終年度に当たるため、これまでの研究をまとめることが課題である。まとめに当たって、「地域性」（ローカリティ）はグローバルな視野のなかで歴史的に「立ち上がっていく」という視点、その意味ではグローバル化とローカル

化は同時進行的なものだという視点から、これまでのデータを検討してゆく。そして、この「地域性の形成論理」とエスニシティがどのようにかわっていくのかを示すことが私の分担課題であるが、ある地域の「民族複合性」（ethnic complexity）を検討することによって、この課題を明らかにしてゆきたい。

田中耕司： 今年度に行った開拓社会の複合性の検討を加味しながら、来年度も、東南アジアの「フロンティア社会」としての特徴をとらえる作業を続けることになる。東南アジア各地におけるフロンティア状況については、インドネシアの南スラウェシ州で従来から行ってきた開拓前線の調査と、最近行ったカリマンタン各州での調査、およびスラウェシ島各州の調査を比較することになるが、とくに、資源と人間・社会との関係、なかでも森林資源や土地資源をめぐる「フロンティア状況」の比較が中心になる。また、東南アジアの社会・文化の文脈のなかでの東南アジア固有の「フロンティア」概念の索出も今年度に続けて行っていきたい。最終年度にあたるので、本研究課題での私の分担課題について、最終報告をまとめる準備にとりかかる。

6. 研究業績（平成7年度発表分）

坪内良博

"A Malay Village in Kelantan, 1970-1991." *Southeast Asian Studies*, vol. 33(3): 285-302, 1995.

『マレー農村の20年』京都大学学術出版会, 323+ix p., 1996.

石井 溥

「南アジアにおける人の範疇化とそのイデオロギー的側面 — ネワール、パルパテ・ヒンドゥー、ミティラーからの考察」杉本良男(編)『宗教・民族・伝統 — イデオロギー論的考察』(南山大学人類学研究所叢書V)南山大学人類学研究所, pp. 131-154, 1995.

「ネワール、パルパテ・ヒンドゥー、ミティラーの人生儀礼の比較研究」石井溥(編)『南アジア、

- 東南アジアにおける宗教、儀礼、社会 — 「正統」、ダルマの波及・形成と変容』(Monumenta Serindica no. 26)東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 205-227, 1995.
- "Caste and Kinship in a Newar Village." In *Contested Hierarchies*, Clarendon Press, ed. by D. Gellner and D. Quigley (eds.) Oxford, pp. 109-157, 1995.
- 「人と学問 — 原忠彦」『社会人類学年報』21, pp. 101-114, 1995.
- 「ミティラーの家屋と生活」『アジアの民族造形文化(金子量重先生古希記念論集)』徴蔵館, pp. 17-27, 1995.

加納啓良

- "Sentralisme Keuangan dan Prospek Pembangunan Daerah Otonom di Indonesia." In *Negara dan Kemiskinan di Daerah*, ed. by Didik J. Rachbini et al., Jakarta: Pustaka Sinar Harapan, 1995.
- 「農業の変容」安中章夫・三平則夫編『スハルト政権下のインドネシアの政治と経済』アジア経済研究所, 1996.

北原 淳

- 『タイ：工業化と地域社会の変動』(赤木攻と共編著)法律文化社, 463p., 1995.
- 「風土と地理」綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいタイ(第2版)』弘文堂, pp. 35-71, 1995.
- 「共同体意識と村落開発：タイNGO農村開発理論の検討」『社会学雑誌』12: 34-54, 1995.
- "Rethinking the Theory of Watthanatham Chumchon (Culture of Community) in Rural Development Movement of Thailand." 『文化学年報』14: 1-24, 1995.
- "Cognitive Framework of Animism and Technical Innovation of Community Development Movement in Thailand: with Special Reference to the Concept of 'Popular Wisdom'." 『国際協力論集』3(1): 97-118, 1995.
- 「共同体再評価論とその問題点：日本と東南アジアの場合」山手茂・古屋野正伍編『国際比較社会学』時潮社, pp. 117-126, 1995.
- 「地域開発」郡司篤晃編『テキストブック 国際保健』日本評論社, pp. 26-29, 1995.
- 『共同体の思想：村落開発理論の比較社会学』世界思想社, 220+vii p., 1996.

山下晋司

- 「芸能の〈競争〉と〈育成〉」藤井知昭監修『新世界民族音楽大系』平凡社, pp. 74-75, 1995.
- 「村落の世界、都市の世界」綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいインドネシア(第2版)』弘文堂, pp. 65-81, 1995.
- 「オーソプラクシーからオーソドキシヘ — 現代バリ宗教論覚書」杉本良男編『宗教・民族・伝

- 統 — イデオロギー論的考察』(南山大学人類学研究所叢書V)南山大学人類学研究所,
pp. 39-54, 1995.
- 「神話論理から歴史生成へ」小林康夫・船曳建夫編『知の論理』東京大学出版会, pp. 132-146,
1995.
- 「伝統の操作 — インドネシア・トラジャにおける観光開発と『宗教の再生』」田辺繁治編『アジアにおける宗教の再生 — 宗教的経験のポリティクス』京都大学学術出版会, pp. 267-292,
1995.
- 「20世紀インドネシアの大衆音楽 — ナショナルリズムの自己表現」櫻井哲男編『20世紀の音』ドメ
ス出版, pp. 253-270, 1995.
- 「観光開発の最前線 — バリ島プンリプラン村」(鏡味治也と共著)『季刊民族学』73: 100-107,
1995.
- 「移動の民族誌 — グローバリゼーションと文化の生成(1)観光」『自動車とその世界』264:
67-73, 1995.
- 「民族動態論 — 東南アジアの場合」慶應義塾大学地域研究センター編『民族・宗教・国家 — 現
代アジアの社会変動』慶応通信, pp. 155-176, 1995.
- 「移動の民族誌 — グローバリゼーションと文化の生成(2)移民」『自動車とその世界』265:
63-69, 1995.
- 「移動の民族誌 — グローバリゼーションと文化の生成(3)国境を越えて生きる」『自動車とその
世界』266: 63-69, 1995.
- "Tourism and the Creation of Culture: Case in Bali, Indonesia and Tono, Japan." In *Cul-
ture in Development and Globalization*, Tokyo: The Toyota Foundation, pp. 112-118, 1995.
- "Culture in the Contexts of Tourism: The Interplay of National, Regional and Global Per-
spectives." In *Regional Cooperation and Culture in Asia-Pacific*, ed. by Khien Theeravit and
Grant B. Stillman, Tokyo: United Nations University, pp. 105-114. 1995.
- 「観光の時間、観光の空間 — 新しい地球の認識」『岩波講座現代社会学・時間と空間の社会学』
岩波書店, pp. 99-115, 1995.

田中耕司

- 「アジアにおける日本稲作の性格 — 特にアジアの視点から」『水田稲作農業の生態的考察』日本
農業研究所, pp. 23-33, 1995.
- 「移植と直播」『水田稲作農業の生態的考察』日本農業研究所, pp. 52-63, 1995.
- 『講座文明と環境 第10巻 海と文明』(小泉格と共編著)朝倉書店, 218p., 1995.

「海域世界と稲作の伝播」小泉格・田中耕司編『講座文明と環境 第10巻 海と文明』朝倉書店、
pp. 120-147, 1995.

「社会慣行の規範性：森林の利用と開墾をめぐる地域の論理と国家の論理」『地域と生態環境』（「総合的地域研究」成果報告書シリーズ No. 10）, pp. 47-56, 1995.

「発展途上国の農業事情と今後の作物学」『日本作物学会紀事』64(2): 337-342, 1995.

"Transformation of Rice-Based Cropping Patterns in the Mekong Delta: From Intensification to Diversification." *Southeast Asian Studies*, 33(3): 363-378, 1995.